国立大学法人宮城教育大学　令和２年度完了報告書

１．調査研究概要

本校では研究に取り組むに当たって,以下の三つの研究テーマを視点として掲げ，研究に取り組んできた。

視点１「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」

本校の学校教育目標「体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供」の実現を目指して，研究を進めてきた。２年次の今年度は，学校教育目標をブレイクダウンし,「言語力」「問題解決力」「活用力」「表現力」「調整力」の五つの資質能力を設定し,各教科等をひもづけてチームを編成して研究を進めてきた。今年度は,５つの資質能力を設定したこと，そして全校授業研究会を通して，全職員で５つの資質能力を明らかにしようと取り組んできたこと自体が大きな成果と捉えている。また，この研究を通して五つの資質能力を育んだり，発揮させたりする授業のポイントも整理することができた。課題としては，五つの資質能力のつながりや，発達段階に応じた資質能力の在り方等を明らかにすることである。そのため，今後もこの教科横断的な取組を継続していきたいと考えている。

視点２「学習の基盤となる資質能力の育成に向けた研究」

本校では，学校教育目標の具現化を目指し，副題に掲げているように，各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。毎年，全員が春と秋に１回ずつそして公開研究会と，年３回の授業を提案し，本質に迫る各教科等の研究の検証を重ねてきた。本質に迫る授業の研究は，今年度２年目となりましたがコロナ禍のため，現在は２年次の中間という研究の位置づけとして取り組んできた。これまでの研究から,次の４つの留意点が明らかになっている。

① 各教科等で考える本質に迫る授業の中で資質・能力の育成を目指すこと
② 見方・考え方を働かせながら，子供自身が各教科等ならではの学びにこだわれるようにすること
③ 教材研究を通して教材の本質を明らかにし，単元・題材の構成を練ること
④ 子供の思考や学びの文脈に合わせた展開が欠かせないこと

この留意点を意識しながら，今後も日々の実践を通して各教科等の本質に迫っていきたい。

視点３「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」

英語科では，新しい３観点の目標のもと，指導と評価に取り組んできた。今年度からは，中学年も教科として授業を進めており，指導と評価の在り方について実践を重ねてきた。また，今年度から教科として位置づけているＣ．Ｓ科（コンピューターサイエンス）の学習では，全学年で１０時間のＣＳの時間を確保し実践を重ねてきた。今後，ＧＩＧＡスクール構想に伴い，低学年で使用予定の２４０台 iPad,４８０台のＰＣ（Chromebook）などのハードウエアが整備れたため,その運用と学習を結びつけたカリキュラムを再考していく必要がある。道徳科では，特別な教科道徳となり，道徳教育の具体的な評価の仕方について，校内研修等を通して共通理解を図ってきた。今後も，実践を重ねながら，具体的な姿やよさを見取る力を高めていきたい。さらに,「からだの学習」では，コロナを題材に実践を行う予定となっている。

（年間実施スケジュール）

（令和２年度）

月	取組内容
６月	カリキュラム・マネジメント検討会議① 「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成計画提示
７月	カリキュラム・マネジメント検討会議②（紙面） カリキュラムによる実践研究Ⅰ（～１１月）
８月	カリキュラム・マネジメント検討会議② 研修会②「学びを止めないカリキュラム・マネジメントオンライン研修会」 取組の検証Ⅰ
９月	取組の検証Ⅱ
10 月	カリキュラム・マネジメント検討会議③，取組の検証Ⅲ・Ⅳ カリキュラムによる実践研究Ⅱ（～１１月）
11 月	研修会③「本校で進めるカリキュラム・マネジメントの方向性」 取組の検証Ⅴ 「カリキュラム・マネジメントの手引き」作成
12 月	「カリキュラム・マネジメントの手引き」吟味・修正
１月	公開研究会，カリキュラム・マネジメント検討会議④
２月	カリキュラム・マネジメント検討会議⑤ カリキュラムの見直し・修正
３月	調査研究完了報告書等提出

２．調査研究の内容

実践校【宮城教育大学附属小学校宮城教育大学附属小学校】

（１）　研究テーマ

校内研究の主題

「学校教育目標『体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供』を目指して

～本質に迫る授業を通して～」

☑　a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

☑　b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

☑　c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

（２）　調査研究の内容

視点１「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」

１　研究の内容

校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ，授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指してきた。２年次の今年度は，学校教育目標をブレイクダウンし，「言語力」「問題解決力」「活用力」「表現力」「調整力」の五つの資質能力を設定し，各教科等をひ

もづけてチームを編成して研究を進めてきた。

２　五つの資質・能力に各教科等を紐付けたチーム編成

本校では，全ての教科を研究しているという特性から，各教科に研究を担当している職員がいる。そのため，各教科を担当している職員がチームを編成し，研究を進めていくこととした。令和２年４月の研究全体会で，本校で中心に据えて育成を目指す五つの資質・能力を確認し，その具体と育成に欠かせない授業づくりのポイントを明らかにしていく研究のアプローチを次のように確認した。

①　五つの資質・能力に各教科等を紐付け，チームを編成すること

言　語　力：国語科，英語科
問題解決力：社会科，生活科，家庭科
活　用　力：算数科，理科，ＣＳ科
表　現　力：音楽科，図画工作科，体育科
調　整　力：道徳科，特別活動，食と健康

※「チーム」を編成して研究に取り組む手法　（以下，チーム研究）は本校で初の試み

②　５回の全校授業研究会の中で各チームの授業提案を基に，五つの資質・能力について全職員で協議すること

○８月から１１月の間に，以下の日程で五つのチームに分かれて授業研究を行った。

８月２５日（火）	①問題解決力（社会・生活・家庭）	授業者：遠藤（生活）
９月２８日（金）	②表現力（音楽・図工・体育）	授業者：早坂（音楽）
１０月　７日（水）	③活用力（算数・理科・CS）	授業者：平井（算数）
１０月２３日（金）	④言語力（国語・英語）	授業者：加藤（国語）
１１月１１日（水）	⑤調整力（道徳・特活・食健）	授業者：鹿内（特活）

３　研究の実際

８月２５日に行った「問題解決力」のチームの，生活科での授業提案を皮切りに，５つのチームが１本ずつ授業を提案し，全職員で検討を重ねてきた。問題解決力チームで提案した生活科の授業では，「問題解決力」を「事象を自分事とし，自らのめり込んで問題を解決する力」とし，２年生での授業を提案した。授業後の検討会を通して，問題解決力には「問題を発見する姿」と「問題を解決する姿」が欠かせないことが明らかとなった。

「表現力」のチームは，体育科，音楽科，図画工作科の職員がチームとなって音楽科の授業提案を行った。表現力チームでは，表現力を「自分の思いや考えをよりよく表す力」とし，「アウトプット」する場面だけではなく，「きっかけ」「試行錯誤」「形へ」「アウトプット」の４つの要素として捉え，授業を提案した。チームの授業提案を通して表現は自由だが，授業の中での表現力は学習のめあてや必要な要素など各教科等の特質に基づくものであるべきだということが明らかになった。また，この回の話合いを通して，「設定した資質能力は，すぐに育めるというものではなく，本時だけではなく，長い目で検証していくことが重要である」ということも全員で確認することができた。

算数科，理科，CS 科がチームとして提案した「活用力」の授業では，「活用力」を「経験や既習などを生かしながら，学びを連続させる力」と定義し，２年生の算数科の授業を提案した。授業の中では，とても分かりやすく説明する児童の姿から，言語力の高まりを感じさせられた。さらに，

授業の中での問題を解決しようする姿も見ることができた。そのため，一つの授業の中で，複数の資質能力が発揮されるということを確かめることができた。その一方で，子供が無意識に活用している場面を授業者が見取って価値づけていくことの重要性や，各教科の本質に迫る授業を通してねらいとする資質能力を育てていくべきであるということと全員で確認することができた。

「言語力」は国語科と英語科がチームとなって提案した。「言語力」を「自分の考えを深めたり，よりよく伝え合ったりする際に言葉を使う力」と定義し，３年生で国語科の授業を提案した。検討会を通して言葉の働きとして，認識・思考・表現・伝達という本来的な機能があるということや相手意識の必要性について確認することができた。また，国語科以外の教科の中でも，教科の特性をふまえながら自覚的に子供が言葉を使えるように働き掛けていくことが重要であることを全員で確認することができた。

道徳科，特別活動，食と健康を担当する職員がチームとなって研究を進めたのは「調整力」である。チームでは「調整力」を「自他との対話や関わりを通して，考えや行動を調整する力」と定義し，６年生での特別活動の学級会の話合いの授業を提案した。話し合いの中で，教育目標にある「しなやかな子供」は「調整力」につながっていることを確認した上で，「調整力」の見取りも長いスパンで見ていく必要があることを確認した。また，自己調整を図るためには，テーマが自分事でなければ調整をする必要性が生まれないということや，一人一人の子供の思考の道筋を見取っていく大切さを確認することができた。

４　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

令和２年度に実施した５回の全校授業研究会の中で，各チームによる授業提案を基に本校で中心に据えて育成を目指す五つの資質・能力について全職員で協議した。それにより，五つの資質・能力の具体を捉えるとともに，それぞれの資質・能力を育てたり，発揮させたりする授業づくりで大切にしたいポイントを整理することができた。資質・能力の捉えや授業づくりのポイントについては，今後も全校授業研究会や研究全体会などの授業実践や全体協議を通して，適宜見直しを進めていく。

複数の教科部で取り組むチーム研究のアプローチは，経験や知見が異なる職員が集まることで，実践前の授業構想や模擬授業，実践後の振り返りと授業改善において“広がりや深まり”をもたらした。そして，授業づくりや授業改善に他の教科等の視点をもち込むことで，その教科等ならではの学びを鮮明化することにつながることも見えた。

また，教科横断的に子供の資質・能力をどのように育成していくかを全職員で話し合うことで，子供の育ちについての考えを共有することができた。

その一方で，五つの資質・能力の具体と各教科等で考える本質に迫る授業のつながりを考えることについては，十分ではなかった。教科等ならではの学びの中でそれぞれの資質・能力の育成を目指すことを確認することはできたが，そのつながりを検討するまでは至らなかった。

チーム研究のアプローチは令和２年度に始まったものであり，まだ１年のみの実践である。そのため，研究に深まりが見られるのはこの先であると考える。ここでは「見えたもの」を整理しただけであり，資質・能力を基盤とした教科横断的な取組（チーム研究）を次年度以降も継続することで，成果や課題を明らかにしていきたい。

視点２「学習の基盤となる資質能力の育成に向けた研究」

１　研究の内容

本研究では，学校教育目標で目指す子供の姿を見つめ直すとともに，目の前の子供の実態をつぶさに把握しながら，授業実践を通して五つの資質・能力の具体を明らかにしていく。そして，これらを育成する授業を積み重ねていくことで，学校教育目標を具現化すると考える。

その際，それぞれの授業は本質に迫るものとなっている必要があるだろう。見方・考え方を働かせながら取り組む各教科等の授業とともに，教科等の枠組みを越えた横断的・総合的な展開の中で子供の学びは深まり，資質・能力が育成されていく。このような授業の在り方を，実践を通して本研究で探っていきたい。

そこで，副主題を“～本質に迫る授業を通して～”と設定する。わたしたちは「本質に迫る授業」を以下のように押さえている。

各教科等ならではの学びを大切にし，横断的・総合的な展開も図りながら，これからの時代に求められる資質・能力が育成される授業

また，「本質に迫る授業」を実践していく上で，次の点が欠かせないと考える。

〇教科等を学ぶ意義への理解　〇教材の本質の適切な捉え
〇働かせるべき見方・考え方の吟味　〇育成すべき資質・能力の具体化

学習指導要領解説総則編（H29 告示）では，「『何のために学ぶのか』という各教科等を学ぶ意義を共有しながら，授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくことができるようにする」とあるように，学校教育において教科等を学ぶ意義や教材について明確に捉えることの重要性が強調されている。さらに，資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で，各教科等の見方・考え方を働かせることが重要であることも述べられている。

このように，教師がその教科等を学ぶ意義を再認識するところから始まり，育成すべき資質・能力を発達段階に照らして整理していく。そして，文脈のある内容や時間のまとまりの中で資質・能力が育成されるよう，教材の本質を捉えた上で意図的に単元や題材を構成し，授業づくりに取り組むことが重要だと考える。また，教科等の枠組みを越えた横断的・総合的な展開の中で，各教科等の学びを関連させたり，統合させたりしていく。このような「本質に迫る授業」の実践を重ねていくことで，子供の汎用的な能力を高めながら学校教育目標の具現化へと迫ってきた。

２　学校教育目標の具現化に向けて

平成 31 年４月，研究全体会で本校の新研究がスタートした。新研究では，学校教育目標の具現化を目指し，各教科等の本質に迫る授業を追究していくことを全体で確認した。その上で，職員で具体的な子供の姿を例に挙げながら「学校教育目標で目指す望ましい姿とはどのようなものか」を全体で議論した。

小学校学習指導要領（平成 29 年解説）総合的な学習の時間編では，学校教育目標で実現を目指す子供の姿を校内で議論し，強調点や独自性を明らかにしながら，育成を目指す資質・能力として具体化・鮮明化することの大切さが述べられている。このことから，研究全体会でこのような議論をしたのである。

議論の中で職員は，教科や発達段階など，多面的・多角的な視点１で学校教育目標について大いに考えた。このような議論は，全職員で学校教育目標を具現化するためには欠かせないものであり，学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連付けて新研究を進めていくスタートとして有効であったと振り返る。

その上で，議論を踏まえ，学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連させながら，各教科等で考える本質に迫る授業を具体化することを目指した。研究全体会後まもなく，各教科部で話し合う時間を設定した。

社会科を例に挙げると，本校社会科では，問題解決的な学習を通して，人々の営みについて考えを深め，主権者として主体的に社会と関わっていく資質・能力の基礎を養っていくことにこそ，社会科ならではの学びがあると考えた。その学習プロセスを軸に，学校教育目標を具現化した子供がいたとしたら，その子供はどのように社会科の学習を進めるのかについて話し合った（写真２）。そして，その姿に本校の子供の実態を照らすことで，本校の子供の満足できる姿と課題である姿を明らかにすることができた。満足できる姿はそれまでの研究の成果として今後も継続・向上させることを目指し，課題である姿は改善に向けて研究の視点を当てることとした。

このように，「全体での議論→各教科部での話合い」を通して，目指す子供の姿を具体化しながら，学校教育目標と各教科等ならではの学びを関連付けて各教科等の本質に迫る授業を設定した。

３　研究の実際

本校では，学校教育目標の具現化を目指し，副題に掲げているように，各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。毎年，全員が春と秋に１回ずつそして公開研究会と，年３回の授業を提案し，本質に迫る各教科等の研究の検証を重ねてきた。各教科で考える「本質に迫る授業」については検討を重ねてきた。

国語科を例にすると，国語科では，本校国語科で考える「本質に迫る授業」を「自ら言葉と向き合い，表現に生かす授業」と設定し，「自ら言葉に向かうための課題意識の設定」と「言葉の力を鍛えるための発問構成」という二つの視点を立て，手立てを講じて研究を進めてきた。実践を重ねる中で，言葉に向かうための課題意識を高めるために，言語活動の設定と教師の働き掛けが重要であることが分かってきた。また，「言葉の力を鍛えるための発問構成」では，子供とのやり取りのなかで必要となってくる，切り返しや補助発問の重要性も再確認することができ，検討を重ねてきた。

令和元年度からの２年間，授業実践を通して各教科等の本質に迫る授業と研究仮説の検証を進めた。その中で，課題となっていた授業後の振り返りについては，授業検証シートの作成・活用に取り組んだ。本校では，授業準備に真摯に向き合う文化があるものの，それに比べて授業後の振り返りが浅く，次の授業改善につながっていかないケースが残念ながら散見された。それを解消するべく，このシートでは，各教科等ならではの学びに合わせて検証方法と検証基準を具体的に検討し，授業づくりと同様に授業者が丁寧に実践を振り返ることを求めている。まだまだ十分とは言えないが，授業改善につながる兆しも見えている。今後，検証シートの更なる改良を目指していく予定である。

４　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

今年度は，年度初めの学校のスタートが２か月遅れたということもあり，校内研究は第２年次の中間という位置付けで今年度を終える。そのため，「本質に迫る授業」についての校内研究は

２年次の中間のまとめとして位置付けて進めてきた。成果としては，先生方が「各教科の本質とは何か」を考え授業を組み立てたり，振り返ったりすることができるようになってきた点といえる。課題としては，発問の問い返しの吟味や子供の発言の見取りなど，子供の反応をどう見取りそれを次の指導に生かしていくかという点であることが明確になった。課題を改善するために，先輩教師の授業を見て子供の反応をどう取り上げ次につなげているのかを学んだり，研修会を開いたりするなど，次年度の計画に反映させていく予定である。

視点３「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」

１　研究の内容

①小学校外国語教育における指導と評価の一体化

本校では，外国語教育強化地域拠点事業を受託し，系統的な指導の在り方を探ってきた。現在もノートやワークシート等の活用のみならず，パフォーマンステストを実施し，実際のやりとりを通した評価活動を行っている。しかし，新指導要領に基づいた外国語科における評定や評価の実践を重ねてきた。さらに，本大学の教員と実践校との連携の中で，授業構築と評価の在り方を指導と評価を一体化させた中で検討を進め，カリキュラムの修正を行ってきた。そうすることで，児童が第二言語としての外国語に慣れ親しみ，かつコミュニケーション能力を育む外国語科の授業づくりを目指してきた。

②コンピュータ・サイエンス（CS）のカリキュラム化

今後の社会において AI 時代がおとずれることは，他方面で話されている。その際，AI をよりよく用いるために，コンピュータ・サイエンス科として教科として設定し，思考・判断・表現，モラル，技能を統合して学ぶことができるように実践を重ねてきた。本取組は，情報社会によりよく生きるために必要な資質・能力を育むための実践である。

これまで，本校では，プログラミング教育を情報教育や各教科等の学習内容と関連させながらカリキュラム化を図ってきた。さらに理科や算数科，国語科，図画工作科，特別な教科道徳との関連を図り，プログラミング的思考力の育成を目指して実践を重ねてきた。その取組をもとに，それらを「コンピュータ・サイエンス」として総合化し，情報技術やプログラミング的思考の育成，情報モラルに関する教育を意図的に関わらせながら展開できるように研究を進めてきた。

この取組においても，大学教員と実践校の連携，さらには，ＮＰＯ法人みんなのコードと提携を結び，実践を重ねるとともに，他地域の現場での課題を押さえ，その一助となる情報を提供することができるように取り組んできた。

③道徳教育の充実

特別な教科道徳となり，評価についても取り組んできた。各学年で道徳ノートを作成し，毎時間の学びを蓄積していくことで，同一価値項目の認識の変容や道徳での学びの蓄積を全体で見ていくことを積み重ねてきた。この評価の取組は，授業を充実させることで具現化できるということが，平成３０年度における研究で確認されている。そこで，授業研究を進めながら，児童の道徳性の成長をどのように見取っていくのか，実際のノートや所見例をもとに探ってきた。さらに，道徳教育に関する研修会を開催し，地域に開くことによって，実際

の課題を基に道徳の学習の充実を図ろうと，実践を重ねてきた。

２　調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

①小学校外国語教育における指導と評価の一体化について

平成 27 年度から本校では，児童の外国語の評価の一部として５・６年生の英語科において，ＡＬＴと児童の一対一のやりとりを見取るパフォーマンステストを実施してきた。

児童がパフォーマンステストにおいて，力を発揮できるよう，本校ではパフォーマンステストの在り方について検討を繰り返してきた。その結果，ＡＬＴとのパフォーマンステストで児童がこれまでの学習で高めてきた「思考力・判断力・表現力」を教師が評価するとともに，児童はＡＬＴと一対一で英語を使ってやりとりをすることができた喜びや充実感を感じ，英語学習への意欲や自信にも繋げることができた。

さらに，昨年度から５・６年生の英語科において英語ノートを使用し，評価に活用してきた。使用するノートは，教科書で扱っている英語の字体に合わせたノートを使用し，児童が授業において必要な時に，ノートを活用して自主的に学習を進められるようにしてきた。ノート指導を開始してから，学習した表現を英語ノートに書き残したり，英語ノートに書いた表現を振り返ったりしながら学習を進める児童の姿が多く見られるようになった。また，児童が学習したことを英語のノートに記載させ振り返らせることで，単元のゴールに向けた児童の取組を継続的に見取り，「主体的に取り組む態度」を評価することができた。

②コンピュータ・サイエンス（CS）のカリキュラム化について

今年度，コンピュータ・サイエンス（CS）の時間を教科として設定し，各学年１０時間のカリキュラムで実践を重ねてきた。また，CS の授業の中で指導を行う要素を検討してきたことも大きな成果と言える。ただし各学年の系統性や評価の在り方等の課題が残されている。そのため，次年度以降も，この CS のカリキュラムについて，実践をもとに検討を重ねていく。次年度は情報やコンピュータの特性を捉える活動の設定と吟味しながら，明らかになっていない CS の要素について妥当な活動を設定していく予定である。また，CS の見方・考え方を整理し，発達段階に即した学習活動を効果的に取り入れられるように吟味していく。

また，実践においては継続して日常生活とのつながりに気付かせたり学びの活用を促したりする働き掛けを行っていきたい。GIGA スクール構想の実現でコンピュータの日常利用を充実させ，日常生活でのコンピュータ利用経験を担保できるようになる。そのため，学習内容と日常生活を結び付ける有効な手立てを探るとともに，学びの活用について系統を整理し，CS で育む資質・能力の言語化を実現したい。

③道徳教育の充実について

本校道徳科では，その道徳的価値について自他と対話しながら多面的・多角的に捉え，よりよい生き方を探究していくことこそが道徳科における「本質に迫る授業」であると考えている。「本質に迫る授業」に近付き，学校教育目標の具現化に迫るために，本校道徳科では「中心価値に向かう発問と問い返し」と「自己の生き方について考えさせる活動の設定」に焦点を当てて研究し実践を重ねてきた。

本校では，平成 27 年度より全学年で「道徳ノート」を用いている。これは，「特別の教科道徳」の実施により使い始めたというわけではなく，道徳の時間の中で考えたり学んだりし

たことをいつでも振り返らせたい，そして，一定の時間が経過したときに自分の考えに変容があったか，広がりや深まりがあったかを捉えさせたいという思いから用いてきた。

この「道徳ノート」が，子供たちにとって自己の成長を振り返り，生き方を考える契機となり，教師にとって日々の授業づくりや指導計画，指導方法を改善，工夫する手掛かりとなり，評価をする上での大きな役割を担っている。今後も，児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め，励ますという観点から，具体的な姿やよさを見取っていきたい。

３．全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（○：成果，●：課題）

本調査研究において掲げた３つのテーマから成果と課題について振り返る。

（１）「学校の教育目標の設定及び実現に向けた研究」

○各教科の学びがどのように学校教育目標の具現化につながっていくのかを明らかにしていくために,学校教育目標から５つの資質・能力（言語力・問題解決力・活用力・表現力・調整力）にブレイクダウンして，教科横断的な取組とリンクさせながら，学校教育目標の具現化を目指していくことができた。

○校内研究の主題を「学校教育目標『体も心もたくましく，しかも，しなやかな子供』を目指して」副題を「本質に迫る授業を通して」と掲げ，授業実践を通して学校教育目標に掲げる子供の姿の具現化を目指すことができた。

○各教科等における「学ぶ意義」や「役割」とは何かを改めて明らかにし，教科等で目指す授業像を設定することができた。

○カリキュラムの見直しの観点の一つとして，横断的な指導を掲げ，取り組むことで，資質・能力をベースとした系統立ったカリキュラムの作成の在り方を探ることができた。

●各教科の学びと学校教育目標の具現化をつなぐところの不透明さが課題として挙げられる。学校教育目標具現化の具体的な検証にまでは至らず，今後の課題として挙げられる。そのため，次年度以降も研究を継続し，各教科の学びと学校教育目標の具現化をつなぐ部分の検証を進めていく。

（２）「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究」

○学校教育目標の具現化を目指し，副題に掲げているように，各教科等の本質に迫る授業の構築に取り組んできた。年間を通して研究授業を行い，互いに見合い，検討を重ねていくことで，各教科等及び教材のもつ本質を明確にすることができた。

○子供に各教科等における見方･考え方を働かせながら本質に触れさせていくことで,問い（課題意識）を明確にもたせ,主体的な学びを展開させ,深い学びの実現を目指すことができた。

●授業研究におけるＰＤＣＡサイクルの確立が課題として挙げられる。特に，Ｐ（評価）からＡ（改善）に向けた取組を強化していくことで,更なる学習の基盤となる資質・能力の育成が図られると考える。そこで，今後も授業の評価・改善の方法を検討し実施していく必要がある。

（３）「現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究」

①小学校外国語教育における指導と評価の一体化

○新しい３観点に基づく「主体的に取り組む態度」「知識・技能」「思考力，判断力，表現力」での指導と評価に取り組んだ。指導を行いながら，評価場面や評価の方法について検討を行ってきた結果，「知識・技能」は，Unit の前半部分で，「思考力，判断力，表現力」は，後半部分で評価が可能であることが明らかになった。
○主体的に取り組む態度については，複数の Unit で子供の取組の様子を見取ることが必要であることが明らかになった。
○学期の最後に取り組んでいる ALT と１対１で行うパフォーマンステストでは，評価する観点を「思考力，判断力，表現力」に絞り，評価規準をもとに担任が評価を行うことで，子供の成長をじっくりと見取ることができた。
○高学年でノートを活用し，ノートを用いた指導の在り方について探ってきた。ノートを活用することで個人のレベルに合わせて書く活動に取り組ませることができ，有効に活用することができた。
●本校は１年生から英語活動として，英語に親しんでいる。そのため，中学年での教科化も可能であると考え，今年度より，教科として実施してきた。しかし，教科としての指導の在り方や，評価の在り方の具体についての検討を十分に行えなかった。次年度に向け，中学年での教科としての在り方を，系統性を含め検討していく必要がある。

②ＣＳ（コンピュータ・サイエンス）のカリキュラム化
○全学年１０時間のＣＳ（コンピュータ・サイエンス）の時間を設定し，カリキュラム化を図ってきた。
○コンピュータへの理解を深めさせるための授業について実践を重ね，コンピュータ・サイエンスの体系表を整備することができた。
○プログラミングだけではなくＣＳの授業が必要であることについて，公開研究会の場で提案し，多くの賛同を得ることができた。
○ＣＳの授業では，どの要素を扱う授業なのか，何を身に付けさせる授業なのかが明確となった。
●本校で育成したい情報活用能力の体系表を作成しているが，ＣＳの体系表と関連付け，実践がどこに位置付くものなのか可視化していく必要がある。
●情報活用能力との関連性を明らかにする必要性や教科化に伴う根拠の必要性，今後を見据えたハードウェアの管理，周辺の整備や維持していくための補修等など物理的な課題が明らかとなった。今後，各家庭で，端末を準備したり管理をしたりできるような体制を整えて行けるように検討をしていく。
③道徳教育の充実
○道徳の特質は何か，子供の実態はどうかを根拠にして考え，計画→実践→評価→再実践　のサイクルにより日常の授業を重ねてきたことで，道徳科の特質，「本質に迫る授業」の具体像，価値に迫るための手立てが明らかになってきた。
○ｐ４ｃの取組を積み重ねてきたことで，安心安全に話し合える雰囲気の醸成と聞く（聴く）力が高まり，道徳的価値について自分の生活経験を振り返りながら，自他と対話して考え，よりよい生き方を探究していこうとする姿が見えてきた。
○評価については，学習状況（横）と成長の様子（縦）を１年間の中でじっくりと見取ることを共通理解できた。

●道徳科の授業が１時間の授業で終わってしまっていることが課題としてあげられる。道徳科の授業を，１時間で終えるのではなく，次の道徳科の授業や他教科，領域に関連させて継続的に指導していくことが必要であるため今後も意識して実践を重ねたい。

●評価では「道徳ノート」を活用してきたが道徳科で評価するのは，学習状況や指導を通じて表れる児童生徒の道徳性に係る成長の様子についてである。「書いてある事実」のみを評価するのではなく，子供の記述の裏側を見ることや，授業での発言，学校生活での子供の様子と関連付けて評価していくことを検討していく必要がある。

本調査研究をカリキュラム・マネジメントの３つの側面に即して，見直していく必要があると考える。その際，教育課程を意義あるものにするために， 次の３つの視点からカリキュラム・マネジメントを評価していくことが今後も大切にしていく。

①「学校教育目標」と「教育課程」はつながっているか。

②「教育課程」と「授業」はつながっているか。

③「学校教育目標」「教育課程」「授業」は，児童生徒，地域，学校の実態に応じたものとなっているか。

その結果，全てが連動したものとなってこそ，「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメント」が生きたものとなっていくと考える。